日本に恋をして30年

バイリンガル落語家　ダイアン 吉日（きちじつ）

幼少の頃から、自分は世界中を旅して、いずれ外国に住むことになると思っていた。片道切符を手にリュックを背負い、当てもなくイギリスを飛び出した。訪れた国は60を超えた。ヒマラヤではチベットのラマ僧とおしゃべりをし、タンザニアでイルカと泳ぎ、ブラジルのカーニバルで踊り、モンゴルでラクダに乗り、オーストラリアでスカイダイビングをし、モルジブで海に潜り、スリランカで子象に餌を与え、ニュージーランドでバンジージャンプをし、クロアチアの島々を巡り、コスタリカの浜辺で真夜中に海ガメの産卵を見た。思い返すと数多くの貴重な体験が楽しい思い出として脳裏によみがえる。旅は心を開き、新しい気付きをもたらし、読書からは学べない知識を与えてくれる。

初めて旅に出た頃、携帯もPCもメールもなく、グーグルもソーシャルメディアも存在していなかった。1990年に来日して私はすぐに日本に恋をした。何と言っても安全で治安が良く居心地がいい。飲料の自販機がどこにでもあり、街中でティッシュが無料で配布され、タクシーはドアが自動で開閉し、トイレは「ウォシュレット」、交通機関は正確、郊外には美しい風景が広がっている。それらすべてに私は魅了された。リュックと一冊の和英辞書だけを頼りに、北海道から九州までヒッチハイクで回った。その旅は驚きの連続で、心優しい多くの人々と出会った。

日本についてほとんど何も知らず、日本語もできなかったので奇妙で滑稽な状況にもなった。割り箸はすぐに覚えたが、食べ物に慣れるにはしばらく時間がかかった。ベジタリアンの私は、肉や魚以外の料理を頼むのに辞書が手放せなかった。

漢字が読めず、バツが悪い場面もあった。電車のトイレで押しボタンの文字が読めず、水を流すためのものかと思って押したのだが、非常用ボタンです

時の調べ
Essay

ぐに間違いに気付いた。時すでに遅く、車掌さんが飛んで来てトイレのドアを激しくたたき、「大丈夫ですか、大丈夫ですか」と叫んでいる。どう返事すればよいのか分からず、「大丈夫！　ガイジンです！」とだけ応えた。車掌さんの返事は「あー、なるほど！」（笑）。

間違いは笑いを生む。友人のパーティーに招かれ、格好いい男性に話しかけたとき、席を勧めようと「どうぞ、スわってください」と言うつもりで、間違えて「どうぞ、サわってください」と言ってしまった。小さな誤りだが、大きな違いだ。

日本では英単語が日常会話でも使われるが、意味が違うことがある。喫茶店でコーヒーを注文したらウエートレスに「アメリカンですか」と聞かれたので、「いいえ、イギリス人です」と答えた（笑）。

日本での生活を楽しみながら私は成長した。訪日当初はのんきな観光客だったが、次第に「日本人になりきろう」と強いプレッシャーを感じながら日本社会に溶け込もうと必死になり、自分を見失った。その後、自己表現の創作活動をするうちに自分を再発見し、ありのままでよいことを悟った。

日本での生活は誠に心地よい。日本語が話せるようになってからは視野が広がり、素晴らしい友人もたくさん出来た。多くのことに感謝している。海外で生活すると誰でも、思い通りにならないことや理解できないことが多々あるだろう。私が日本語で話しかけても、相手は私にではなく、近くの日本人に応えることがある。例えば、レストランでサラダとジュースを日本語で注文すると、ウエーターは隣の日本人の友人に「彼女のドレッシングは何にしますか」「ジュースはリンゴかオレンジ、どちらにしますか」と尋ねる。なぜ友人の方に聞くのか私は当惑する。彼女は私の望みを知らないし、私のランチなのだから私に問いかけてほしい。このようなやり取りは30年日本に住んでいてもいまだにある。外国人は全てが観光客ではない。変な感じがするので同じように扱わないでほしい。外国人を恐れないで直接話しかけてくれれば、われわれにとってもよい経験になるし、友だちにもなれるのだ。

日本に来たのは私の人生にとって最良の決断の一つとなった。日本を愛しているし、日本文化は世界中から尊敬されていて、私は今でもその豊かさに感動する。初来日以来、多くの刺激的な機会に恵まれた。自分の殻から踏み出す体験を何度もしてきた。陶器、生け花、茶道、着付け、風呂敷について勉強し、落語家、バルーンアーティスト、笑いヨガのインストラクター、講演会の講師、クルーズ船のエンターテイナー、400着以上の着物を持つ永住者でもある。

これまでの私の人生は魅惑的な旅であった。そこから多くのことを学び、たくさんの貴重な思い出ができた。人生が何を与えてくれるのかは知る由もないが、私を幸せにしてくれるものを見つけることができた。笑顔の共有は、どんな話し言葉よりも力強い。

（英文和訳／事務局）

略歴

英国リバプール出身。ロンドンでグラフィックデザイナーとして働いていたが、1990年、バックパッカーの旅の途中で来日。1996年、英語落語の先駆者、故桂枝雀氏の落語会で「お茶子(注)」をする機会を得る。その話芸とイマジネーションの世界に感銘を受け落語を学び始め、1998年、自ら初舞台を踏む。古典から創作まで「わかりやすい落語」と幅広い年代に愛され、60カ国以上を旅した経験談などの講演会も好評。日本と海外の文化の懸け橋となる活動が高く評価され、2013年6月に世界平和研究所において第9回中曽根康弘賞 奨励賞を受賞。「笑い」で世界をつなぐべく国内外のイベントで活動中。「ダイアン吉日公式ウェブサイト www.diane-o.com/jp」

（注）**お茶子**：落語の舞台で名前が書かれた紙の札をめくったり、座布団を裏返したりするアシスタント